

恐竜の生き残り?!サイ

アニマルフォトグラファー
トラベルライター

平 岩 雅 代

サイはアフリカに住む動物の中では、ゾウ、カバに次いで 3 番目に体の大きな動物です。

アフリカには口が尖った(おちょぼぐちのように見える)クロサイと、口が四角い(ちり取りのような形をした)シロサイの 2 種類のサイが暮らしていますが、名前(クロサイ、シロサイ)は別に体の色が違うわけではありません。どちらも泥や砂を浴びて黒っぽく見えたり、白っぽく見えることがあります。もともとは灰色です。

ではクロサイ、シロサイと呼ばれるようになったのは何故か、といいますと、地面近くの草をバリカンのように刈り取って食べる四角い口のサイを見て“ワイド”(幅の広い)と言ったオランダ人や英国人が、後世に“ホワイト”(白い)と伝えてしまったから…とされています。

そして口が四角いサイが“シロサイ”ならば、もう一方の口が尖っているサイは“クロサイ”だ、と安易な呼び方が定着してしまったのです。

アジアやインドのサイは、いずれも一角ですが、アフリカのサイはクロサイ、シロサ



写真1 クロサイの母子連れ (マサイマラで撮影)

に近い成分)が固くなったもので、切ってもまた生えてくるのですが、昔から中国では漢方薬(風邪薬や強精剤)として珍重され、また中東ではカーブした短剣の鞘にピッタリ、と好まれ、象牙とともに大きな問題になっています。

密猟者対象に業を煮やしたアフリカのある国では、政府の高官が真剣に「サイの角を我々が切り取って、代わりに人工の角をかぶせてはどうか」と話し合った、とも伝えられています。人間の勝手な都合のために、罪もないサイがどれくらい命を落としたことでしょうか……。

ところでサイは、短い草が繁るサバンナや森林帯に単独で暮らし、繁殖の時だけカップルを作ります。繁殖期が終わりますと、オスとメスはそれぞれまた別々の暮らしに戻ります。メスは約540日の妊娠期間と、その後子どもが性成熟するまでの4～5年は、母子で共に行動します。

クロサイの成獣は体重1,400kg(1.4t)前後、シロサイは更に大きく体重2,000kg(2t)前後になりますが、体を支える四肢は短く、全体にずんぐりとした体つきです。

一般的にサイは目が良くないので、相手が近くまでやって来ないと、何者なのか判断できないといわれています。そのため、至近距離に近づいて来られるまで微動だにせず、「サイは体が大きい動物だから肝もすわっている」と誤解される一面もあったようです。

現在、東アフリカにはシロサイよりも、クロサイのほうが圧倒的に多く、タンザニアのンゴロンゴロを始め、ケニアのマサイマラ、アバーディア、ナクル湖畔などで、運が良ければその姿を見ることができます。一方、シロサイはケニアのメルーが有名な生息地でしたが、密猟者の一団によって絶滅してしまっただけでなく、南アフリカから運ばれたシロサイを、ナクル湖畔やケニア山麓の保護区などで、わずかに見ることができます。

サイはその外見から、恐竜の生き残りのように思われることもあります。動物学者の説によりますと、200万年前位までは種類も多く、世界各地に分布していたということです。

ケニアのマサイマラで、幼い子連れしたクロサイに出会った時は、動く縫いぐるみのようにかわいい子どものしぐさに、思わず微笑んでしまいました。また角もほんの申し訳程度に生えかけたばかりで、岩山のように大きな母親のあとをけん命についていく姿は、いじらしいほどでした。

遅れそうになって尖った唇を「ウー」とも言うように突き出して母親を呼ぶ声は、意外に高く、サイの別の一面に触れたような気がしました。



写真2 立派な角を持つクロサイの昼寝
(ンゴロンゴロで撮影)

〈サイひとくちメモ〉

▶東アフリカ各国(ケニア、タンザニア、ウガンダなど)で話されている公用語のスワヒリ語で、サイはクロサイ、シロサイともに“ファル”と呼ばれている。

厳密には1頭の場合は“キファル”、2頭以上の複数の場合は“ビファル”と区別される。

▶サイの寿命は、野生の場合30～40年といわれている。